

【DRニュース・050】：孔子に学ぶ「論語と算盤」・これからの「倫理と道德」と自動運転

2019年06月28日発信

今回は、現在の先の見えづらい社会状況から、**2500年前の中国の古典と150年前の近代日本の実業家の書物**から、これからの社会の倫理と道德の学びとAI・人口知能を行う上で必要な倫理観を考えよう。

1. 現在の社会状況

(1) 米国大統領トランプの流儀

昨今、世界的な話題を呼んでいるのは、トランプ流ツイッター（Twitter）外交です。それは、米中貿易摩擦、イラン中東問題等々、大統領の権限と資質に問題があると感じる言動です。

① アメリカ第一主義の弊害

自国ファーストと謳っているが、自由貿易でなく・・・自国優先の保護主義になっていないか？

② 大統領の権限と弱点

アメリカ大統領の基本的な役割は、行政権を担うことにあり、行政に関わる全てのことは、大統領が一人で決定することができる。この制度は議員の反論が出来ず・・・独裁的にならないか？

③ 大統領の資質と欠陥

相手国に対する通商圧力や制裁を強化して、出口戦略のない思いつきの言動や行動で、選挙に対する人気取りをしているのではないか？・・・トランプ大統領に欠けているものは、何なのか？

上記の問題は、裏返せば、日本や中国、欧州に対しても各国の事情もあるが、同じような問題が顕在化している。報復すればその連鎖で相手側も報復合戦となり、出口が無く、收拾が着かない状態が続いている。

(2) 令和元年は明治維新の頃と相似

明治維新から150年以上経った、今年の令和元年（2019年）は、日本は大きな転換点を迎えている。特に、従来の「常識や習慣」が過去のものになろうとしている点は、明治維新の頃と相似している。

さらに、世界に目を向けると、この先社会がどうなっていくのか？ AI・人工知能や技術は進展するが、経済や外交の先行きに不透明さが残り、軋轢（あつれき）のある社会が横行しそうな様相を呈している。

そんな中で、先が見えづらい不確実な社会に対して、どうしたら良いのか？

・・・2500年前の「論語」と150年前の「論語と算盤」から、「倫理と道德」を学び、現代社会で、「人生をどう生きるべきなのか、人としてどのように振舞ったら良いのか」AI時代の課題を探ろう。

2. 孔子

【北京の孔子廟（文廟）は、1306年の建立】

孔子は英語で「Confucius」といいます。
儒教は、孔子の教えという意味の「Confucianism」といいます。



(1) 孔子の生涯

孔子は、紀元前 551 年：【**今から 2570 年前**】に、今の中国の山東省のあたりにあった「魯（ろ）の国」でうまれますが、当時の中国は「春秋戦国時代という戦乱の世」でした。父親は、軍人でしたが早くに亡くなり、貧しい母子家庭で苦労して育ちます。

母親は巫女であったとされ、当時の身分社会の中で後ろ盾がないまま、成人してからは自らの力で人生を切り開いてゆきます。下級役人から徐々に出世して政界に入りますが、若い頃から高い知性とカリスマ性もあったことから、孔子のもとには門弟がたくさん集まりました。

しかし、50 代の時に政治で失脚して亡命することになります。13 年間諸国を遊説して歩きます。69 歳で祖国に戻りますが、政界に返り咲くことはなく、74 歳で他界するまで門弟を教え、私塾を開いて弟子を育て、自分の誠心を継承しました。

孔子には 3 千人の弟子がいたともされ、高い人間性に加えて強いリーダーシップも備えていました。また外見的にも身長が 2 メートルに近く、スポーツマンであったともされていることから体格もよく、理想のリーダー像を地でいくような人だったことが想像できます。

また孔子は結婚し、子供も設けました。しかし孔子よりも子供が先に亡くなったことはわかっていますが、家庭生活について詳しいことはあまり伝わっていないようです。

そのようなことから、孔子の人生は表舞台に立って活躍した生涯というわけではありませんでしたが、**苦難の連続が孔子の人間性にさらに深みを与え、孔子の言行録である『論語』が 2500 年の時を超えても色あせない・・・人生の本質を語ったものであることの所以（ゆえん）ではないだろうか。**

(2) 孔子の主な弟子

『論語』は弟子との問答が書かれているため、多くの弟子が登場します。中でも主な弟子は、「曾子（そうし）」、「子夏（しか）」、「子貢（しこう）」の登場回数が多いようです。

- ①「曾子」は、孔子の孫の「子思（しし）」が師事した人で子思から「孟子」に教えが伝わりました。
- ②「子夏」は、学問を好み、「孔門十哲」：（孔子の弟子の中で最も優れた十人のこと）の一人です。
- ③「子貢」は、実業家としても腕をふるい、「孔門十哲（こうもんじつてつ）」の一人でもあります。

(3) **孔子が自分の人生を語った言葉**

【十有五にして学を志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳したがう。七十にして心の欲するところに従えども、のりをこえず】

現代語訳：わたしは15歳のとき聖人を習得する学を志した。

30歳になったとき、精神的にも経済的にも独立することができた。

40歳で自分の人生に惑いがなくなった。50歳で天命を与えられたことを自覚した。

60歳となり、人の言葉を素直に聞けるようになった。

70歳となってからは、

..... 心のままに言動しても、決して道徳的規範を外れることはなくなった。

学問とともに生き、74歳で生涯を閉じた孔子でしたが、

..... 最後には心のまま自由に生きる境地に達した清々しさが伺える言葉です。

(4) **孔子の思想は『論語』にまとめられる**

孔子の言葉を孔子の死後に、門弟たちがまとめたものが『論語』です。

「論」は論議、「語」は答述という原義があり、『論語』とは孔子の論議と答述を記録したものです。

① **『論語』は「儒教」の経典**

『論語』は儒教の経典で、「孟子」の漢の時代に国教とされて正式に認められることとなります。

孔子の説いた儒教思想は孔子の弟子から弟子に伝わり、その教義や学説が深められてゆきました。

② **「儒教」の思想の中心は「仁」**

儒教の思想の中心に「仁」の概念があります。

「仁」は最高の徳であり、人を思いやり、慈しむ心（いつくしむこころ）とされています。

..... 「仁」があれば、おのずと道徳は保たれ、社会が安定すると孔子は説きました。

3. 論語(1) **論語とは、**

『論語』は、『孟子』『大学』『中庸』と併せて、「朱子学」における「四書」の1つに数えられる。

四書のひとつである『孟子』はその言行の主の名が書名であるが、

..... 『論語』の書名が（たとえば「孔子」でなく）『論語』であるその由来は明らかでない。

（『漢書』巻30 芸文志に「門人相與輯而論纂 故謂之 論語」と門人たちが書き付けていた

孔子の言葉や問答を、孔子死後に取り集めて論纂し、そこで『論語』と題したとある）。

..... 四書のひとつの『中庸』は、孟子を教えた「子思（しし）」が編集したとされている。

『論語』は、古代中国の思想家、「孔子の教え」を弟子たちが書き留めたものです。紀元前5世紀頃に記されて、現代でも、なお広く語り継がれています。

人生の生きる道や考え方、道徳などを述べており、現在のビジネスマンも参考にしています。

．．．．． シンプルな短い言葉の中に、様々な解釈ができる要素が含まれています。

(2) **論語の有名な名言から**

論語の構成は、孔子とその弟子たちの問答集(数行～長くても数十行)です。20編からなるが、それぞれの編の内容はまとまったものではない。



「子曰く」(孔子先生がおっしゃるには～)で、文章が始まるのが特徴です。

① 【子曰く、学びて時にこれを習う、また、説(うれ)しからずや】

- ・ 現代語訳：師がおっしゃった、学問を続け、何度も復習すれば学んだものは自分のものとなって、喜ばしいことだ。「時に」は「しかるべき時に」という意味です。「習う」は「学習する」よりも「実際に行う」ということを指します。
- ・ 補足：当時の学びは、書経や詩経といった学習のほかに、礼儀や音楽、祭典や儀式などの規則理解や実践の意味が込められています。

② 【朋あり、遠方より来る、また楽しからずや】

- ・ 現代語訳：同じ師のもとで学んだ友人が遠方からやって来る、こんなうれしいことはない。
- ・ 補足：旧友が遠くからやって来るときの喜びを述べています。

③ 【人知らずして慍(うら)みず、また君子(くんし)ならずや】

- ・ 現代語訳：人が自分のことを分かってくれないからと言って、腹を立てないのが一人前だ。
- ・ 補足：「君子(くんし)」とは、徳が高く品位のある人、人格者のことです。論語ではたびたび、君子と一般の人の違いについて説かれています。

④ 【巧言令色(こうげんれいしょく)、鮮なし仁(すくなしじん)】

- ・ 現代語訳：言葉ばかり巧みで愛想のいい人に、誠実さがあることは少ない。
- ・ 補足：お世辞や表面だけの良さ、媚(こ)び へつらうような態度をいましめる言葉です。

⑤ 【これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず】

- ・現代語訳：知っているだけの人は好む人に勝てない、好むひとは楽しむ人に勝てない。
- ・補足：物事を知っている人より、そのことを好きな人の方が上であり、好きな人より楽しんでいる人はさらに上であるという意味です。
物事を極めたければ、知るより好め、好むよりも楽しめ、とも受け取れます。

⑥ 【速やかならんと欲することなかれ、小利を見ることなかれ】

- ・現代語訳：成果をあげようと焦らないこと、目の前の小さな利益に捉われすぎないこと。
- ・補足：この言葉に続けて、早く成果をあげようとすると成功しないし、小さな利益に気をとられると大きな仕事は完成しない、という言葉が続きます。

⑦ 【過（あやま）ちて、改（あらた）めざる、是れ 過ちという】

- ・現代語訳：過ちをしても改めない、これを本当の過ちというのだ。
- ・補足：生きていれば、誰でも過ちを犯すものです。それも1回や2回ではありません。
大切なのは、過ちを犯さないことでは無く、この過ちから自分を省みて次に活かすことです。
過ちをそのままにしてしまうことが、最大の過ちであると言っている。

⑧ 【これを知るを これを知るとなし、知らざるを 知らざるとなせ、これ知るなり】

- ・現代語訳：知っていることは知っている、知らないことは知らないとする。これこそが「知る」ということだ。
- ・補足：知ったかぶりをやめて、知らないことは「知らない」と言うことが、真の「知る」ことだ。

⑨ 【学んで思わざれば、すなわち罔（くら）し、思うて学ばざれば、すなわち殆（あやう）し】

- ・現代語訳：学んでも考えなければ、ものごとははっきりしない、考えても学ばなければ、独断におちって危険である。
- ・補足：知識や情報は自分の頭で整理して考えないと、本当の役に立つものになりません。
また、一人で考えても情報を得なければ、懸命な判断ができず独善的になってしまいます。
「学ぶこと」と「考えること」はどちらに偏ってもいけなく、両方を行っていきなさいといこと。

⑩ 【故（ふる）きを温めて新しきを知る、もって師となるべし】

- ・現代語訳：古いことをよく探求して現代に応用できるものを知っていく、そういう人こそ人の師になれる。
- ・補足：「温故知新（おんこちしん）」という四字熟語にもなっている言葉です。
いま正に「論語」を学ぶ私達にも言える言葉です。

⑪ [【義を見てせざるは、勇なきなり】](#)

- ・現代語訳：人として行うべきことを知っているにもかかわらず、できないのは勇気が足りないからだ。
- ・補足：正しいことでも行動を起こすには勇気が必要です。勇気が足りないことに気付かせ、行動を起こすように促す（うながす）励まし（はげまし）の言葉でもあります。

⑫ [【君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず】](#)

- ・現代語訳：賢い人は人と調和するが安易に同意はしない、愚かな人は意見がなく流されるが協調性はない。
- ・補足：周囲と協調はしても軽々しく妥協しないのが本当の賢さだと述べています。

⑬ [【過ぎたるはなお及ばざるがごとし】](#)

- ・現代語訳：行き過ぎることは、足りないのと同じようによくないことだ。
- ・補足：バランス良く適切に物事を行いましょう。やり過ぎもよくない、「中庸」を説く言葉です。

⑭ [【老者安之、朋友信之、少者懐之】](#)

- ・現代語訳：老人には安心されるように、友達には信じられるように、若者には慕われるようになることだ。
- ・補足：孔子の二人の門弟である子路と顔淵がそれぞれの志を述べ、「どうか先生の御志望をお聞かせください」と問われたときの答えです。何とも肩の力を抜いた、孔子という人物を象徴するような回答です。これは意味もそうですが、響きとリズムも好まれています。

⑮ [【父母には唯だ其の病をこれ憂えしめよ】](#)

- ・現代語訳：父母にはただ自分の病気のことだけを心配させるようにしなさい。
- ・補足：病気はやむを得ない場合もあるが、そのほかのことでは心配をかけないようにすることです。

2500年以上前に書かれた言葉とはいえ、現代にも通じる部分がたくさんあることに驚かされます。

今回の紹介は、「論語」のほんの一部で、まだまだ数多くの名言があります。

「論語」には、学習や人付き合い、親子関係や老後についてなどを記した語が散りばめられています。

．．．．． 「仁」：仁という思いやりの心

．．．．． 「義」：義という道理に敵うこと

- 「礼」: 礼を忘れないこと
- 「智」: 智恵を備えてわきまえること
- 「忠」: 忠という真心
- 「信」: 信頼されるよう誠実であること
- 「考」: 考案することが大切だと述べられています

この中でも特に重要視されたのが、「仁」と「礼」です。

論語は、中国の古典の中でも読みやすい本で、自由に読める名言集です
論語を読めば一つは座右の銘にしたいくなるような、言葉と出会えるはず

論語は、人生の生きる道や考え方、道徳などを主に述べていますが、現在に通じる部分がたくさんあります、論語の読み方、解釈の仕方、活かし方に、正解はありません

100 人いれば 100 通りの受け止め方があって良いし、だからこそ奥が深く面白いのです

(3) 『論語』とヨーロッパの関係

① 17 世紀西洋人による「論語」の伝わり

ヨーロッパでは、中国大陸で布教活動を行っていたイエズス会の宣教師により、『大学』『中庸』と共にラテン語に翻訳〔1662 年〕、17 世紀にフィリップ・クプレによって出版された。

これは後にルイ 14 世の中国哲学研究の命を受けた同会士イントルチェッタ、クプレらによって刊行され『中国の哲学者 孔子』〔1687 年〕のうちに『大学』『中庸』の訳文とともに収録されている。本稿で取り上げる『中国の哲学者 孔子』は中国古典中にキリスト教における神的概念に対応するものが存在すると見る中国哲学有神論説の立場に立つものであった。

中国の哲学はシノワズリの一部としてヴォルテール、モンテスキュー、ケナーといった思想家らに大影響を与え、啓蒙思想の発展に寄与した。

※**シノワズリ** (仏: **chinoiserie**) は、ヨーロッパで流行した中国趣味の美術様式で、中国をイメージし、非対称の縮尺や、漆(うるし)など独特の素材や装飾を用いた様式が特徴である。ヨーロッパでシノワズリが流行を始めたのは、17 世紀半ばから後半頃と伝えられる。18 世紀の中ごろにロココ趣味と融合し、人気が最高潮となった。



② 論語からフランス革命へとつながる

『論語』をはじめとする儒教の教えは、後世の歴史にさまざまな影響を与えましたが、その例の一つがフランス革命だとする、驚くような見解があります。

現代の民主主義や人権思想の源流とされるフランス革命に対し、封建思想の典型のような『論語』およそ結びつきそうもない両者ですが、実は意外なつながりがあったというのです。それによると、そもそものきっかけは、キリスト教の宣教師たち、日本史でもおなじみの

・・・ フランシスコ=ザビエルが所属していたイエズス会士らの布教活動にあったとされています。

彼らは積極的に東アジアに進出し、熱心にキリスト教の布教に努めるとともに、

・・・ 世界各地の“知の遺産”を集める活動にも力を注ぎました。

宣教師たちは、とりわけ『論語』や『孫子』などの中国古典を次々に翻訳し、母国に伝えていきました。その結果、たとえば、ルイ 14 世は中国服を着てパーティーに出席したといいますが、マリー・アントワネットの書庫には中国古典を紹介した書物が数多く収められていたといわれます。

・・・ フランスの貴族の間で中国ブームが巻き起こります。

ところが、皮肉にもこれが「フランス革命」の下地になっていきます。

当時のヨーロッパでは、国王の権威は「王権神授説」によって支えられていました。つまり、「王の権利は神から付与されているのであって、王は神に対してのみ責任を負い、神以外の何人によっても拘束されず、国王のなすことに民衆は何ら抵抗できない」とする考え方です。過酷な政策が当然のように実施され、フランス国民は悲惨な状況に追い詰められていきました。

一方、『論語』などの儒教系古典には、王朝の交替、つまり”革命”を是とする思想がありました。王であることは確かに天から命じられているものの、その天命は民衆の支持によって決まってくる。

・・・ 民衆が見放せば、その王朝の天命が失われてもよい、とされていたのです。

『孟子』にも次のような言葉があります—— 天の視るはわが民の視るにより、天の聴くはわが民の聴くによる ・・・ (天は民衆を目として見、天は民衆を耳として聴く) ——

モンテスキューやヴォルテールといった当時のフランスの知識人たちは、この考え方にたいへん驚き、そして自国にもこのような思想を取り入れるべきだと考えました。

・・・ 彼らは、王権神授説に対抗する思想的根拠を、儒教系の革命思想のなかに見出したのです。

そして 1789 年、バスティーユ監獄の襲撃が勃発

..... [フランス革命が始まります。](#)

『論語』や儒教系の古典は、最初は宣教師による知の戦略として紹介され、たちまち貴族の間に広まったものの、それが自らを滅ぼす革命への思想的な背景を作り出してしまった。



..... [世界の歴史の意外なところで意外な影響を及ぼした古典、それが『論語』というわけです。](#)

(4) 『論語』と日本の関係

日本人の道德規範や倫理観と深く関わりのあるものとして、中国から伝わったのが「論語」です。

① [日本への伝わり](#)

『論語』は、漢字や仏教と共に日本に伝わり、聖徳太子や空海なども論語を学んでいました。

『日本書紀』によれば、『論語』は応神天皇の時代の西暦 285 年に百済から献上されたとされています。日本最古の書である『古事記』は西暦 712 年にできたため、

..... [『論語』は、日本人が手にした最初の書物であることとなります。](#)

また、西暦 604 年に制定された聖徳太子の十七条憲法の「和をもって貴しとなす」の言葉は、

..... [『論語』にある「和を貴しと為す」をもとにしているといわれています。](#)

※聖徳太子は今から 1500 年前の政治家で、仏教を取り入れたり、役人の制度や心得を示したりして、国の基盤づくりに貢献した。「十七条憲法」には、役人や豪族が守るべき[道德]が示されています。

② [江戸時代〔1603 年～1867 年〕には武士の必読の書となった](#)

知識層の間で論語は読まれ続け、江戸時代には儒学である「朱子学」を幕府が正式な学問として採用したことから [論語は武士の必読の書となりました。](#)

(※朱子学：宋代になると仏教（とくに禅宗）の影響をうけつつ、儒教を哲学的に再編しようとする動きが起こり、「道」「理」「気」「性」などという概念を駆使して、世界と人間のあり方を統一的に説き示そうとする「道学」「理学」としての儒学が形成されることになった)

江戸時代には幕府から奨励されて、全国の寺子屋で広く論語が学ばれ、

..... [一般庶民でも論語を暗唱していました。](#)

発祥の地の中国では、政府からの弾圧で一時論語が封印されていましたが、

..... [日本から逆輸入する形で、再び広まったといえます。](#)

③ **明治時代〔1868年～1911年〕には「教育勅語」に反映され、軍国主義に利用された**

明治時代になると、明治天皇が道徳に関心を寄せていたことから、明治天皇の勅語である「教育勅語」が発布されます。

・・・ 「教育勅語」は日本の伝統的な規範や価値観をベースにして、「儒教の教え」を反映させた道徳教育の教科書でした。

④ **昭和に入り、第二次世界大戦中〔1939年～1945年〕には**

「教育勅語」は天皇が与えた国民思想の基礎として神聖化され、

・・・ その本来の趣旨から離れて、軍国主義に利用されるようになります。

敗戦後の1946年には「教育勅語の朗読」と「神格的な扱い」が、

・・・ 米国の連合軍総司令部(GHQ)により禁止されます。

⑤ **近年は再び注目されている**

戦後の経緯から、『論語』は封建的な過去の遺物とされ、戦後世代には忘れられたかみえました・・・ **しかし** **その後の行き過ぎた資本主義の反省と、道徳や倫理の乱れに対する危機感から、近年、「論語」は再び注目されています。**

また、明治時代の代表的な実業家である「**渋沢栄一**」が「論語」をビジネスの基本としたことは有名で、現代の実業家やビジネスパーソンの愛読書として「論語」は読み継がれている。

なぜ今、「渋沢栄一」なのか

それは、常識にとらわれず、その状況で最も理にかなった選択をするという発想の持ち主であった

晩年に、積極的に訴えたのが『論語と算盤』に代表される商業道徳の重要性だった孔子から学んだ『論語』を紐解き、ビジネスパーソンが持つべき道徳心を体系化した

また、彼の生き抜いた時代（江戸時代、明治維新、明治、大正、昭和）の生き様を調べることで

500社もの会社の設立に関わった彼の功績はすごいと感じるが、実際には失敗した事業もありそんな生き様を知れば、偉大な人物でも数奇の運命と苦難の連続であったことに勇気づけられる

これからの急成長する東洋のアジアの進展や日本の再興で、正しい精神を継承していけると感じる

次章で、資本主義の父の「渋沢栄一」と孔子と孟子に学んで記した「論語と算盤」を調べてみる

4. 孔子や孟子に学ぶ「論語と算盤（そろばん）」

『論語と算盤』は、言うまでも無く、「論語」が道德で、「算盤」が経済活動を表したものである。

(1) **渋沢栄一** 「日本の資本主義の父」と言われる

① **彼の生涯における五つの時代**

生まれた年がアヘン戦争（1840年）で、亡くなった年が、満州事変（1931年）と、彼が生きた時代はまさに東アジア激動の時代でした。

そんな中、日本は西欧を始めとする外の文明と接して、新たな文明を築き上げようとしていた。



幕末、明治、大正、昭和と生き抜いた91年あまりの彼の生涯は、大きく五つの時代に分けられる。

ア. 江戸時代後期の生家で過ごした少年時代

- . . . 理不尽な身分制度のもとで村人のために苦勞をする父母の姿、そこから公共心、利他の大切さを悟った。こんな矛盾に満ちた土農工商の世の中は、変えなければならない。そのために「武士」になるのだと考えた。

イ. 尊皇攘夷運動に加わっていた幕末の青年時代

- . . . やがて、尊皇攘夷運動（幕末に外国船の来航が多くなり、鎖国の維持が危うくなったとき幕藩体制の秩序を再強化するための政治理論として、尊王攘夷論が登場した）に身を投じ故郷をはなれて、倒幕を論じていた。（幕府・武家政権を転覆させるテロ集団）

ウ. 徳川家に随行し、渡仏して大政奉還に直面した時代

- . . . ではなぜ、尊皇攘夷論者がその後徳川家に仕え、渡仏（フランスへ渡る）するのか？（倒幕派の尊皇側も幕府に味方する佐幕派も両方の気持ちがかかる渋沢に裏ミッション「本来の目的以外の裏の任務 or 使命」が与えられた）
- . . . 初めての海外で、渋沢はヨーロッパの近代国家と文化を目のあたりにした。とりわけ、産業や経済の発展がいかに大切かを痛感した。
- . . . だが、一年あまりの滞在中、日本は大変なことになっていた。慶応3年（1867年）、大政奉還（幕府が朝廷に政治を行う権利を返上）され、徳川幕府は消滅していたのである。

主君の慶喜が将軍となった（慶応2年（1866年）～慶応3年（1867年））のに伴い、幕臣（将軍直属の家臣）となり、フランスのパリで行われる万国博覧会（1867年）に将軍の名代として出席する。

慶喜の随員として御勘定格陸軍付調役の肩書を得て、フランスへと渡航する。

パリ万博を視察したほか、ヨーロッパ各国を訪問する。

各地で先進的な産業・軍備を実見すると共に、社会を見て感銘を受ける。

その頃から、常識にとらわれず、その状況で最も理にかなった選択をするという発想の持ち主であった。



左が1866年(26歳)／右が1867年(27歳)

エ. 大蔵官僚時代 . . . (※大蔵とは財政・通貨・金融に関する事務を担当する国の行政機関)

明治維新の推進者の一人、大隈重信（※立憲改進黨を創立し、総理となり自由民権運動の一翼を担った）に、新しい国づくりに携えて行こうと要請されて、洪沢は1869年（29歳）に民部省（大蔵省吸収）の改正掛に就任した。そこは、国の新しい仕組みを創るところだった。

- . . . 健全な国家の基盤となる財政金融制度を築くため、貨幣制度を制定し、近代的な銀行制度を導入した。また、度量衡、電信、鉄道、郵便制度を実施したほか、官営の富岡製糸工場（世界遺産登録）のプランなどを立てた。

オ. そして、実業家時代

明治6年（1873年）に、彼が（33歳）の時、大蔵省を退官し、一介の実業家として独立。

- . . . 本当に豊かな国を作るためには、自らが率先して起業し、産業を興していこうと決心をした。私の志は青春時代、しばしばふらついた。最後に実業界で身を立てようとした。
- . . . この時が私にとっての本当の「立志」だった。
そして、国を豊かにすることで文明も進歩すると「道徳経済合一説」を提唱した。

② 実業家として開放的な経営

明治から大正にかけて活躍した実業家・渋沢栄一。設立や運営など、その生涯に関わった企業は約 500 を数えると言われ、「日本資本主義の父」と評されている。加えて、約 600 の教育・社会事業にも携わったとされる。

そんな“偉人”については、これまであらゆる形で語られてきた。しかし、ここにきて、渋沢栄一の「理念と功績」に改めて注目が集まっているという。

そのキーワードとなるのが、彼が行った「**開放的な経営**」と「**倫理と利益の両立**」だ。

グローバル化が進んだ現代において、渋沢が実践した『開放的な経営』を求める機運が高まっている。また、彼が徹底した『倫理と利益の両立』は、今、多くの経営者が目指す形といえる。

③ 設立に関わった企業・団体

着目したいのは、設立した企業の業種の多さだ。

33 歳で創立した第一国立銀行（現、みずほ銀行）を皮切りに、鉄道、電気、ガス、不動産開発、物流など、現代でも社会インフラとして重要な役割を果たしている企業が多い。

ア. 設立した企業

みずほ銀行、王子ホールディングス、東日本旅客鉄道、東京急行電鉄、東京海上日動火災保険、東京電力ホールディングス、東京ガス、日本郵船、帝国ホテル、東宝、渋澤倉庫、IHI、太平洋セメント、東京証券取引所、東洋紡、キリンビール、サッポロビール等：500 社

・・・100 年以上残る社会インフラを築く企業に着目している。

イ. 携わった団体

東京商工会議所、日本取引所グループ、全国銀行協会、一橋大学、日本女子大学、東京女学館、津田塾大学、理化学研究所、東京都健康長寿医療センター等：600 団体

・・・「日本資本主義の父」と呼ばれるが、教育や医療のテーマにも真正面から向き合った。

・・・教育では、当時の日本で軽んじられていた商業教育と女子教育に力をいれた。

・・・医療では、現在の東京都健康長寿医療センターの前身となる東京養育院の経営に 50 年以上も関わった。

④ 関東大震災で被災者を支援

1923年9月1日に発生した関東大震災（被災者190万人、行方不明/死亡者10万5千人）のとき、渋沢は、復興のためには、大震災善後会副会長となり寄付金集めなどに奔走した。

- ・・・関東大震災が起きた時、83歳の渋沢は、第一線を退いていたが、経済界のネットワークを活用して臨時病院や避難所を設置し、さらには孤児院を作り、親を亡くした子どもたちを迎え、高齢ながら行動力で日本社会を救った。

⑤ 新年号「令和」の新紙幣の発行

2019年4月9日、日本政府が新紙幣の発行について発表をした。

新紙幣・「新日本銀行券」は、2024年上期を目途に発行が予定されている。

紙幣の偽造防止対策として定期的に行われている。

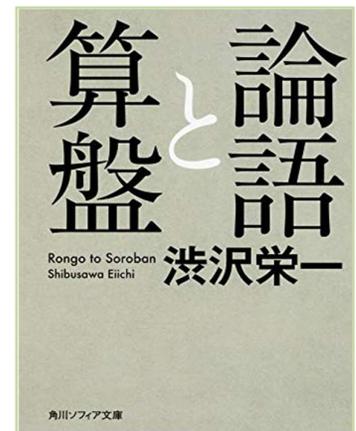


新・一万円札に採用されるのが、「渋沢英一（しぶさわ・えいいち）」。

(2) 「論語と算盤（そろばん）」

『論語と算盤』は、大正五年（1916年）〔今から百年前〕に出版された。後世に伝える「渋沢栄一」は、実業を行う上で「論語」の自らのあり方を正しく整え、人と交わる際の日常の教えなど、孔子が語った道德観を規範にして、世の中で身を処していくよりどころとしたのが、「論語」でした。

- ・・・そして、「論語」とビジネスを結び付けた点が、この本の卓抜としたアイデアです。



ともすれば、出世や金儲け一辺倒になりがちな資本主義の世の中を「論語」に裏打ちされた道德で律し、公や他社を優先することで、豊かな社会を築くという思想は、

- ・・・時代を超えたビジネスの原点として、今も経営に携わる人々に読み継がれています。

けれども、この二つを私たちが両極端（りょうきょくたん）に感じるとすれば、儒学者たちによる洗脳が、いまだに解けきれていないためかもしれない。

- ・・・実は、孔子のあとの儒学者達は、「論語」について間違った伝え方をしていると渋沢は言う。

「論語」は孔子のあとの中国や江戸時代の日本で朱子学として伝えられていった。

いわく、金儲けは人間を卑しくする。道徳に則った生き方をしようと思えば富や地位は手にできない。

・・・ところが、この考え方に懐疑的なのが、「論語」を生きる規範とした渋沢栄一なのです。

「いや、そんなことはない。孔子は利殖を悪いとは一言も言ってない。そのやり方が道徳に則っているべきなのだ」と、渋沢は指摘している。

・・・そこから、渋沢栄一は、道徳と経済の合一説を説いて行った。

渋沢栄一は、この『論語』の教えを、実業の世界に植えこむことによって、そのエンジンである欲望の暴走を事前に防ごうと試みたのである

現代に視点を移して、昨今の社会を考えて見ると、働き方や経営に対する考え方は、グローバル化の影響もあって実に多様化している。

「金で買えないモノはない」「利益至上主義」から「企業の社会的責任の重視」まで、さまざまな価値観が錯綜し、その軋轢（あつれき）の中で右往左往せざるを得ない状況である

この百年間、日本は少なくとも実業という世界に恥じない実績を上げ続けてきたその基盤となった考えを知ることが、先の見えない時代に確かな指針を与えてくれる

(2-1) 第1章： 処世（しよせい）と信条（しんじょう）

① 『論語』とソロバン（算盤）は、はなはだ遠くて近い物

「ソロバンは『論語』によってできている。『論語』もまた、ソロバンの働きによって、本当の経済活動と結びついている。だからこそ『論語』とソロバンは、とてもかけ離れているように見えて、実はとても近いものである。

・・・道理と事実と利益は、必ず一致するものである。

モノの豊かさとは、大きな欲望を抱いて経済活動を行ってやろうというくらいの気概がなければ、進展していかないものだと考えている。空虚な理論に走ったり、中身のない繁栄をよしとするような国民は、本当の成長とは無関係に終わってしまう。

② 「士魂商才」（※明治維新後（1868年頃なので今から150年前）は、まだ、武士が牽引していた）

武士の精神と、商人の才覚とをあわせ持つ、といことを提唱している。

人の世の中で自立していくためには武士のような精神が必要であることはいうまでもない。

しかし武士のような精神ばかりに偏って「商才」がなければ、経済の上からも自滅を招くようになる。だから「士魂（しこん）」とともに「商才（しょうさい）」がなければならない。

- ・・・その「士魂」を、書物を使って養う場合いろいろな本があるが、やはり『論語』がもっとも「士魂」養成の根底になる。では「商才」の方はどうかというと、こちらも『論語』で充分養えるのだ。道徳を扱った書物と「商才」は何の関係もないように思えるが、もともと道徳を根底としている。不道徳や嘘（うそ）、外面ばかりで中身のない「商才」など本当の「商才」ではないと言える。

③ 争いは良いのか、悪いのか

他人と争いをするということは、人が生きていくなかで果たして利益になるものだろうか、逆に不利益を与えるものだろうか。実際問題となると、これは随分人によって意見が異なる。「争いは断じてなくすべきだ」というものがあるかと思えば、また、「絶対になくすべきだ」と考えている人もいる。

- ・・・私自身の意見としては、争いは何があってもなくすべきものでもなく、世の中を渡っていく上でも、はなはだ必要なものであると信じている。中国古代の思想家である「孟子」は、「敵国や外患がないと、国は必ず滅んでしまう」と述べている。健全な発達を遂げていくためには、商工業においても、学術や芸術、工芸においても外交においても常に外国と争って必ず勝つ意気込みがないと決して成長も進歩もない。

(2-2) 第2章 : 立志（りっし）と学問（がくもん）

① 精神の向上が富の増大につながる

明治維新後、日本には物質的、科学的な教育がほとんどないといってよいくらいであった。武士への教育にはレベルの高い内容がいろいろ用意されていたが、農工商に携わる人への学問は、ほとんどなかった。明治6年ごろから物質文明の進歩に微力ながらも全力を注ぎ、実業家も増大したが、何としたことか、“人格”は明治維新前よりも退歩したとおもう。

- ・・・富は積み重なっても、哀しいかな武士道とか、あるいは社会の基本的な道徳というものがなくなって、精神教育が全く衰えていると思う。
- ・・・物質文明が進んだ結果は、精神の進歩を害したと思うのである。
私は常に精神の向上を、富の増大とともに進めることが必要であると思う。

② 大きな志と小さな志の調和

生まれながらの聖人なら、志をたてることに迷いはないかもしれない。しかし我々凡人は、そうはいかないのが常である。目の前の社会風潮に流されたり、一時の周囲の事情にしばられたりして、自分の本領でもない方面へ、うかうかと乗り出してしまうものが多い。

- ・・・志をたてる要は、良く己を知り、身のほどを考え、それに応じてふさわしい方針を決定する以外にないのである。誰もがその塩梅を計って進むように心がけるならば、人生の行路において、問題が起こるはずは万に一つもないと信じる。

③ 立派な人間の争いであれ

私のことを、絶対に争いをしない人間であるかのように思っている人が、世間には少なくないように見受けられる。もちろん、好んで他人と争うことはしないが、まったく争いをしないというわけではない。

- ・・・正しい道を進んで行こうとすれば、争いを避けることは全体にできないものなのだ。
- ・・・何があっても争いを避けて世の中を渡ろうとすれば、善が悪にまけてしまうことになり、正義が行われなくなってしまう。
わたしはつまらない人間だが、正しい道に立っているのに悪と争わず、道を譲ってしまうほど、円満で不甲斐ない人間ではない。
- ・・・人間は人格が円満でも、どこか角がなければならない。あまり円いとかえって転びやすい。あまり円満になりすぎると、「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」と『論語』で、孔子がいつているように、人としてまったく品性がなくなってしまう。

(2-3) 第3章 : 常識（じょうしき）と習慣（しゅうかん）

① 常識とはどのようなものなのか

およそ人として社会で生きていくとき、常識はどんな地位にいても必要であり、なくてはならないものである。では、常識とはどのようなものだろう。わたしは次のように解釈する。まず、何かをするときに極端に走らず、頑固でもなく、善悪を見分け、プラス面とマイナス面に敏感で、言葉や行動がすべて中庸にかなうものこそ、常識なのだ。

これは学術的に解釈すれば、「智・情・意（知恵・情愛・意志）」の三つがそれぞれバランスを保って、均等に成長したものが完全な常識であろうと考える。さらに言葉を換えるなら、ごく一般的な人情に通じて、世間の考え方を理解し、物事をうまく処理できる能力が常識に他ならない。

- ・・・この三つの調和が要らないという者など誰もいないだろう。「知恵と情愛と意志」の三つがあつてこそ、人間社会で活動ができ、現実成果をあげていけるものである。

② 正しい立場に近づき、間違っただ立場から遠ざかる道

物事に対して、「こうすべきだ」「こうすべきでない」と是非の基準をはっきり持っている者は、すぐにでも常識的な判断をくだすことができる。でも、場合によっては、そう単純に割り切れないこともある。

例えば、誰が見ても正しい道理を押し立てられて、言葉巧みに誘導されると、知らず知らずのうちに、自分の日頃の主義主張とは正反対の方向に誘導され、足を踏み入れてしまうような羽目になる。こんな場合は、「無意識のうちに自分の本心をなくされてしまうわけだが、こんな状況に直面しても、頭を冷静に保って最後まで自分を見失わないようにすることが、「意志の鍛錬」の重要な働きなのだ。

- ・・・こんな場面に陥ったなら、相手の言葉に対して、常識に照らし合わせながら「自問自答」してみると良い。「相手の言葉に従うと、一時は利益を得られるが、あとで不利益が起こってくる」、「この事柄に対しては、こうきっぱり処理すれば、目先は不利でも将来のためになる」といったことが、はっきりとわかってくる。
- ・・・自分の本心を思い出すことはとても重要だ。その結果、正しいことを選び、間違っただ事から遠ざかることが出来る。私は、以上のようなやり方こそ、「意志の鍛錬」だと思う。
- ・・・こうして鍛錬した心で、物事に臨み、人に接するなら、社会を生きていくうえで過ちを犯すこともなくなるだろう。

(2-4) 第4章 : 仁義（じんぎ）と富貴（ふうき）

① 本当に正しく経済活動を行う方法

実業というものを、どのように考えればよいのだろうか。もちろんそれは、世の中の商売や工場生産といった活動が、利潤を上げて行くことに外ならない。もし商工業が、物質的な豊かさをもたらさなかったら、商工業など無意味になってしまう。

- ・・・しかし、経済活動を行うにあたって、もし皆が「自分の利益さえ上がれば、他はどうなってもいいや」と考えていたらどうなるだろう。
- ・・・孟子がいうように、
「利益のことなど口にする必要はない。社会のためになる道徳こそ大事なのだ」
「上にいる人間も、下にいる人間も、ともに利益を追い求めれば、国は危うくなる」
「もし、みんなのためのことを考えずに、自分一人の利益ばかりを考えれば、人から欲しいものを奪い取らないと満足ができなくなる」

- ・・・だからこそ本当の経済活動は、社会のためになる道徳に基づかないと、決して長く続くものではないと考える。

② 「経済活動」と「富と地位」を、孔子はどう考えていたか

今まで孔子の教えを信ずる学者が、彼の考えを誤解していたなかで、もっとも甚だしいものは、「富と地位」と「経済活動」の二つの考え方であろう。学者らが『論語』を解釈したところによると、「道徳と思いやりの政治を掲げて、世の中を治める」ことと、「経済活動によって富と地位を得る」こととは、火のついた炭と氷のように、一緒にはしておけないものとされている。

- ・・・では、孔子は本当に、「富と地位を手にした者は、道徳によって世の中に貢献する考えなどない。だから、高い道徳を持った人物になりたければ、金儲けなどしようと思っはならない」と説いていたのだろうか、二十編ある『論語』を隈なく探したがどこにもない。
- ・・・「道理をともなった富や地位でないのなら、まだ貧賤（ひんせん）でいる方がましだ。しかし、もし正しい道理を踏んで富や地位を手にしたのなら、何の問題もない」
- ・・・「まっとうな生き方によって得られるならば、どんな賤しい仕事についても金儲けをせよ。しかし、まっとうではない手段をとるくらいなら、むしろ貧賤でいなさい」
- ・・・正しくない富や、道に外れた名声であれば、いわゆる「浮き雲」のようで、すぐに消えてしまう。

(2-5) 第5章：理想（りそう）と迷信（めいしん）

① 道徳は進化すべきか

道徳というのは、理学や科学といったもののように、少しずつ進化していくものだろうか。つまり文明の進歩とともに、高度になっていくのかということである。

そもそも道徳という文字は、中国古代の伝説上の時代の「王者の道」という意味が語源になっている。「古いものは自然に進化するべきだ」というダーウインの説に従って、進化という現象が生物だけに限らないとすれば、おいおい起源の古い道徳も進化していてもよいのではないか

- ・・・進化論は生物の学説だが、研究を重ねると生物ばかりではなくさまざまなものが、時の流れに従って変化するもの、いや変化というより前進していくものという感じになっていかないだろうか

- ・・・しかし一方で、仁や義といった、社会正義のための重要な道徳を考えると、東洋人の考え方はあまり変化がないように思われる。これは西洋の数千年前の学者や聖人、賢人と呼ばれている人の考え方を見ても、まったく同じなのだ。今日、技術が以下に進歩して、モノに対する知識が豊かになったとしても、この根本の点については変わらない。
- ・・・結局、道徳の根本に関していうなら、昔の聖人や賢人の説いた道徳というものは、世の中の進歩によって物事が変化するようには、おそらく変化しないに違いないと思うのである。

ただ、社会の事柄は、年ごとに進歩しているように見える。また学問も、国内外を問わず少しずつ新しいものが出てきている。こうして社会は、毎日毎月、進歩するのに対して、世間はそうはいかない。年月がたつ間に、マイナス面が出てきてしまい、長所が短所となり、利益が害悪になることから逃れられないのだ。

- ・・・特に、悪い習慣づけが続くと、澆刺（はつらつ）とした元気がなくなってしまう。このため、昔の人もこんな教えを述べている。
「殷王朝を創始した湯王（とうおう）は、自分の顔を洗うタライに『一日を新たな気持ちで、日々を新たな気持ちで、また一日を新たな気持ちで』と刻み込んでいた」
- ・・・何でもない教えなのだが、確かに、毎日新たな気持ちでいるのは面白い。その一方で、すべてが形式的になってしまうと、精神が先細りしていく。
・・・ 何についても「一日を新たな気持ちで」という心掛けが肝心なのです。
- ・・・仁や義といった観念は、ずっと東洋人である私たちが引き継いでいっているようだ。ただ、『論語』は人生の本質を語ったもので、根本の進化はないが解釈は多々あるだろう。

② 本当の文明

「文明」とは何かというと、国の体制が明確になっていて、精度がきちんと定まり、一つの国として必要な設備が整っていて、法律も完備、教育制度も行き届いていることになるだろう。しかし、このようにさまざまな政治の枠組みがきちんとしていても、まだ文明国とはいえない。

- ・・・枠組みが整ったら、そのうえで一国を維持し、発展させるような実力を備えていなければならない。実力というと軍事力と言う意味がどうしても強くなるが、警察の制度や地方自治の組織など、みなその力の一部なのだ。
しかも、それぞれがバランスよく調和し、一体化して、何かの比重が高すぎるとか、まとまりを欠くということのない状態、それが、「文明」といえる。
- ・・・しかし、その国の枠組みばかりが整備されても、それを「使いこなす人」の知識や能力、人格と知恵、が備わり、伴っていなければ、本当の「文明国」とはいえないのである。

(2-6) 第6章 : 人格（じんかく）と修養（しゅうよう）

① 自分を磨くのは、理屈ではない

「修養」～自分を磨くことは、どこまで続ければよいのかというと、これは際限がない。ただし、このときに気をつけなければならないのは、頭でっかちになってしまうことだ。自分を磨くことは理屈ではなく、実際に行うべくこと。だから、どこまでも現実と密接な関係を保って進まなくてはならない。

- ・・・まず、理論と現実というものは、お互いに一緒になって成長していかないと、国家の本当の発展には結びついていかない。どれほど一方が成長しても、もう一方もこれに伴っていないと、その国は世界の強国のなかで張り合っていくことができなくなる。
- ・・・現実だけ知っていても充分とはいえないし、かといって学問の理論だけ身につけていても社会に打って出ることはいできない。この両者がよく調和して一つになるときこそ、国でいえば文明が開けて発展できるし、人でいえば完全な人格を備えた者となるのだ。
- ・・・現代において自分を磨くこととは、現実のなかでの努力と勤勉によって、知恵や道徳を完璧にしていくことなのだ。つまり、精神面の鍛錬に力を入れつつ、知識や見識を磨き上げていくわけだ。しかもそれは自分一人のためばかりでなく、一村一町、大は国家の興隆に貢献するものでなくてはならない。

(2-7) 第7章 : 算盤（そろばん）と権利（けんり）

① 競争に潜む善意と悪意

わたしと同じ実業家（たとえば輸出貿易に従事する人）の立場の人に「商業道徳」などというと、もしかしたら商業だけに道徳があるように聞こえてしまうかもしれない。しかし、道徳というのは世の中の人すべてが歩むべき道であるから、単に商人だけが持っていればよいというものではない。

また、「商業の道徳はこうである」「武士の道徳はこうである」「政治家の道徳はこうである」と、別々に区分けされているわけでもない。

- ・・・人の歩むべき道であるからには、すべての人が守るべきものなのだ。

商売をする上で、注意を促したいのは、競争における道徳を挙げたい。どんなことでも一生懸命やろうと思ったら競争が不可欠だ。競争は成長や進歩の母というのは事実だ。

- ・・・だが、これには、善意の競走と悪意の競走の二種類があるようだ。

たとえば、毎朝、誰よりも早起し、志を高く抱いて知恵や努力で他人に打ち勝とうとすること。これは、もちろん良い競争だ。一方、他人が考案した商売が受けているのに目をつけ、利益をかすめ取ってやろうと、じわじわ商売を横取りするのはどうだろうか。

これは、もちろん、悪い競争だ。

この例は、はっきりと善悪に分けられたが、

- ・・・ 実際に事業をしていくうえでは、百人百様のやり方がある。それと同じように、競争のあり方も限りなくある。

では、どのように経営したらよいのだろうか、悪意の競争を避けるとはどういうことか。

それは、自分と相手とが商業道徳を重んじるという意識を強く持ち続けていれば、悪意の競争に陥ることはない。

- ・・・ 競争が過熱しすぎても、ある一線で、これだけはやってはいけないという自制が効く。

(2-8) 第8章 : 実業（じつぎょう）と士道（しどう）

① 物まね時代との別れ

たびたび有識者が指摘するように、私たち日本人には悪い癖がある。

それは、外国製品をむやみにありがたがる風習だ。外国製だからダメだという必要がないのと同じで、外国製じゃないからと国産品を低く評価する理由もないはずだ。

それなのに海外製品といえはすべて優れたものばかりという思い込みが、国民の上から下まで深く染み込んでいるのは、実に腹立たしい。もっとも日本は明治維新によって西欧文明を取り入れてからまだ日が浅く、その過程で欧米諸国から文化を輸入してきた面がある。

- ・・・ そのせいで欧化主義が流行して手を焼いたこともあったし、今もいわばその後遺症として海外製品をありがたがる風潮がはびこっている。

しかし、今は明治維新から半世紀になろうとしている。すでに日本は、東洋の盟主であり、世界の先進国の仲間入りを果たしたのだ。それなのに、いつまで欧米の製品に酔いしれているのだろう。また、いつになったら自分の国を卑下する愚かさから脱却することが出来るのだろう。

- ・・・ そんなことでは権威も大国の民としての誇りも持てない。私は心の底から国民が自覚するのを望んでいる。

私達は今すぐ、欧米に酔いしれてきた時代ときっぱりと別れなくてはならない。そして、物まねをやめて、自分たちの意志をもとに行動していく段階に入っていかなければならない。

だが、この意味を極端で不合理な消極主義だと、はき違えた人がたくさんいた。国産品を買おうという呼びかけも、極端な消極主義や排他主義と受け取られるかもしれない。そうになると賛同してくれる仲間に迷惑がかかる。

- ・・・ 自国に適した産物を作り、適さない産物は輸入することを間違えないようにしたい。

(2-9) 第9章：教育（きょういく）と情誼（じょうぎ）

① 理論より実践

世間一般の教育を見ると、とりわけ中等教育の劣化が目立つようだ。単に知識を与えることだけを重視し過ぎている。言い換えるなら、道徳の分野が明らかに欠けている。一方で学生の気質を見ると、昔の青年の気質と違って、いまひとつ勇氣と努力、そして、自覚が欠けている。

たくさんある科目を修得することにかかりきりとなり、いつも時間に追われている。他のことを顧みる余裕などなく、人格や常識などの修養に注意をそそぐことができないのも当然だ。これはつくづく残念なことである。

文明の進歩というものは、政治、経済、軍事、商工業、学芸などが足並みをそろえて進歩し、そこで初めて実現されるものだ。その中のどれか一つが欠けても、完全な発達、つまり文明の進歩は望めない。それなのに日本では、文明の一大要素の商工業が長い間放置され、顧みられることがなかった。一方でヨーロッパの列強をみると進歩しているのが実業、つまり商工業だ。わが国でも最近になってようやく実業教育に世の中が注目するようになり、進歩や発展がある。・・・だが、残念なことに、その教育のやり方は、多くの教科と同じく、大急ぎで、ひたすら理論と知識の詰め込み教育の一点張りだ。規律であるとか、人格であるとか、道徳上の義務などは、まったく顧みられない。本当に嘆かわしいことです。

(2-10) 第10章：成敗（せいはい）と運命（うんめい）

① どんな時も真心と思いやりを

仕事とは、地道に努力を重ねれば精通していくが、気を緩めると荒んでしまうと言われる。これはどんなことでも当てはまる。大きな喜びと感動を胸に抱いて仕事に取り組むなら、どんなに忙しくても、どんなに大変でも、決して飽きたり、嫌気がさしたりしないものだ。

逆にまったく楽しくなく、嫌々、言われたことをやっているようだと、必ず飽きてくるし、そのうち不平を感じるようになる。そして、最後は仕事を投げ出してしまう。

これはもう、自然のなりゆきである。

前者の場合は、精神が澆刺^{はつらつ}とし、楽しみながら仕事をしているうちに、やり甲斐をみつけるだろう。後者の場合は、精神がぐたくたになり、不満で憂うつになる。そして倦怠感から疲れ果て、やがて身の破滅を迎えるのだ。

・・・自分で努力して運を切り開いていかない限り、決して幸せをつかみ取ることは出来ない。

「論語と算盤」の本書は、渋沢栄一が書いたものでなく、その講演の口述をまとめたものである
本を出版するにあたって、編集者が九十項目を選んでテーマ別に編集したのが本書である

時代が変わっても変化しない、人間と人間社会の本質
論語による人格形成と、資本主義の利益追求、の両方を追求する

「道徳経済合一説」

経済を発展させ、利益を独占するのではなく、国全体を豊かにするために
富は全体で共有するものとして、社会に還元するという考え方

5. 倫理と道徳・AI自動運転の倫理観

(1) 事業における倫理観

事業における倫理観をどう養うか。それは「論語」に従おうとすることからは生まれない。

・・・「論語」の精神を理解したうえで、自ら判断していく姿勢から育まれる。

① 論語で培う（つちかう）バランス感覚

片方に道徳、もう一方に利殖や出世欲、この二つを一致させることが必要となる。お金や地位は誰だって欲しい。けれども孟子が言うように「欲にはキリがない」最後は略奪まで働いてしまう。

事業には必ず損得がつきまとうが、そこに倫理観がないと決して長続きしないと渋沢は警告する。

・・・もちろん、仕事を進めたい、事業を発展させたいという欲望は人間の心につねに持つておくべきだ。しかし、その欲望は「道理」によって制御するようにしたい。

・・・ここでいう「道理」とは、それは最終的に世の中のためになるか、今は良くても、長い目で見てどうかということだ。最終的に全体の調和を見極めたうえで行動を起こそうとしている。

② 常識を知ることの大切さ

常識を持つことが、調和の取れた振る舞いにつながる。

行動を起こす際に突飛なことをせず、頑固になりすぎないこと。また、物事の是非や善悪を見分け、利害と得失を識別していること。そして、言葉と行動とが偏っていないことだ。

- ・・・常識とは、世の中のさまざまな考え方の真ん中を知ること、
そのためには、多くの人と対話（コミュニケーション）し、多様な意見を取り込むことだ。そして、知識や経験の蓄積が常識を養うのだ。

③ すべてに秀でた凡人のすごさ

何かの能力が飛びぬけていたから英雄となったわけだが、たいてい英雄は人格が偏^{かたよって}っている人であり、それよりも、私たちは常識人でありたいと渋沢は言う。

常識人とは「知、情、意の三つが調和し、偏^{かたよる}ることなく発達した人」のことだ。世の中で求められている人材は、英雄ではない。

- ・・・いつも必要とされるのは、知性と思いやりと意志の調和が取れた常識人だ。

④ 調和の取れた発展が文明国を作る

バランス感覚が大切なのは、国家も同じだ。

政治、経済、文化などあらゆる分野がそろって発展して初めて、文明国となる。

渋沢が実業界に身を投じたのは、いまだ育ち上がっていない経済を自ら強くしていくためだ。

- ・・・民間が経済の活力をつけることで、社会も富み好循環が生まれる。

⑤ 異なるものの中に共通点を見いだそう

世界を相手に事業をするにあたって、東洋、西洋を問わず人類には共通するものがある。

- ・・・それは、たとえば約束は必ず守るといった基本的なことだ。

論語には「自分が望まないことは、人にもしないこと」という言葉がある。キリスト教的な倫理観では「自分がして欲しいことを、他の人にもしてあげなさい」とよく言われる。

同じ真実を片方は右から、片方は左から言っている。論語の商業道徳は世界でも通用する。

- ・・・常に公正に論理的に物事をとらえ、異なるものの中に共通点を見出すことで意識を高める。

(2) イーロンマスクの倫理と道徳

イーロンマスクは、オンライン決済システムの PayPal（ペイパル）、電気自動車事業のテスラ・モーターズ、宇宙事業のスペース X、太陽光エネルギー事業のソーラーシティなど、複数の世界的企業を立て続けに創設している世界最高の天才起業家です。

① イーロンマスクの野望

イーロンマスクは 1971 年生まれというまだ 48 歳の若き革命家ですが、その野望は 2 つあります。

- 地球環境を守るための持続可能な新エネルギーを実現
- 人類の新しい環境となる宇宙（火星）への移住

② 学年という概念がない学校を設立

自身の 5 人の子どもを、才能ある子ども向けの名門私立学校から退学させ、秘密の学校に入学させた。

- 2014 年に、「アド・アストラ（Ad Astra）」という秘密の学校を設立した。
（※アド・アストラは、ラテン語で「星へ向かって」という意味のこと）
- 詳細はほとんど知られておらず、一般向けのウェブサイトも存在しない。
- この学校について、イーロンマスクは 2015 年以降、公共の場で発言をしていない。
（※2015 年のインタビューでは、学校を工場の組み立てラインのように扱うのではなく、それぞれの「素質や能力に合った教育」を提供する方が理にかなっていると説明した）

③ イーロンマスクが創った謎の学校の正体とは

生徒数 31 人という小さな学校のこだわりの一つが、「**倫理や道徳に関する会話を重視**」している。

子どもたちがいつか直面するかもしれない、現実世界で起きている事例について議論することで授業が展開されるという。そしてそれは、道徳や倫理の課題として実践されるであろう。

【アド・アストラで聞いたゲームプレー／ロールプレーの事例は次のようなものだ】

湖の畔にある小さな町を想像してほしい。
 ここでは住民の大半が 1 つの工場に雇用されている。
 ・ ・ ・ しかし、工場は湖を汚染し、その生き物を殺している。
 あなたならどうするだろうか？
 工場を閉鎖すれば、皆、失業してしまう。
 ・ ・ ・ 一方で、工場を稼働させ続ければ、湖はダメになってしまう。

こうした会話／ゲームプレーを「**普段から繰り返し行う**」ことで、

- ・ ・ ・ 子どもたちは極めて重要な観点から、世界を見ることができるようになる。
（※ 多様性を学ぶ場で合ってほしい。絶対的な TRUE とは何か、考えさせられる問題です）

こうした類の道徳的、倫理的思考は、イーロンマスクにとって珍しくない。

- ・ ・ ・ **彼は、技術の進歩がもたらす倫理的な問題について、つねに考える必要性を指摘している。**

(3) AI・自動運転の倫理観

次に、AI・人工知能を搭載した自動運転車のプログラム制御について考えて見よう。

これは、近い将来にエンジニアが直面する問題で、難しい判断をするのは人間ではなく、判断は、その場で瞬時に下されるわけではなく、自律走行車に事前にプログラムされる事になる。

① 自動運転の「トロッコ問題」

倫理学の有名な思考実験に「トロッコ問題」がある。

ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか？ または、自動運転車に乗っている人が犠牲になることも許されるのか？ 避けられないとしたらどちらが優先されるのか？

トロッコ問題はトロリー問題とも呼ばれ、イギリスの哲学者フィリップ・ルース・フット（1920年-2010年）が提起した倫理学的な思考実験のことを指す。

・・・人間の道徳的ジレンマや合理性に関する研究の一部として議論が続いている。

ブレーキを踏んでから停止までの制動距離は決してゼロになることはないし、ブレーキが損傷することもある。（ただ、ブレーキ損傷は現在の人間の運転による車でも極少ないが起こりうる。

- ・人間の運転だとブレーキとアクセルを踏み間違えて、車が暴走することが良くニュースになる）
- ・犠牲を避けられない事態に陥った場合、AIはどのような判断を下すのか、下すべきなのか。

【トロッコ問題の事例1】

ブレーキが故障した乗用車が、歩行者5人のいる横断歩道に突っ込もうとしている。クルマに乗っているのは運転者だけだ。クルマを横断歩道の手前にある障害物にぶつけて止めれば歩行者5人は助かるが、車内の運転者1人は助からない。逆に、歩行者5人が犠牲になれば、社内の運転者1人が助かる。

この場合は、たいていの人は歩行者5人を助けるべきだと考えるだろう。

【トロッコ問題の事例2】・・・それでは、問題をもう少し複雑にしてみよう。

クルマを運転しているのは妊婦で、さらに実はもう1人の乗客がいる。3歳になったばかりの子どもだ。そして、5人だと思った歩行者は実は人間4人とイヌ1匹で、4人のうち2人は犯罪者、1人は高齢者、1人はホームレスだとする。

ついでに、全員が赤信号なのに横断歩道を渡っている。（つまり信号無視をしている）もちろん現実には、ほぼ確実にありえない状況だ。

それでも、あえてどちらか選ばなければならないとしたら、あなたはどうするだろう。

この場合は、信号無視しているのだから、歩行者を犠牲にしてもやむをえないと考える。では、信号無視をしていなかったら、とっさの判断で、どちらを選択するであろうか？

② MIT メディアラボの研究成果

自律走行車が事故に直面したとき、誰を犠牲にすることが「正解」なのか

人工知能（AI）を搭載した自律走行車が特定の状況でどのような判断を下すべきだと思うか、世界中の人々に意見を求めた。オンラインの調査は英語版だけでなく、アラビア語、中国語、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語の計 10 言語が用意され、233 の国と地域に住む 4,000 万人近くが回答している。

(ア) 優先的に助けるべきは？

- I 生存者と犠牲者の数で決める
- II 性別 III 年齢（乳幼児／子供／大人／高齢者） IV 種（人間／犬／猫）
- V 健康状態（アスリート体型／肥満体型）
- VI 社会的地位（経営者／医師／ホームレス／犯罪者）
- VII 搭乗者と歩行者のどちらを優先するか VIII 交通規則の遵守を重視するか
- IX 介入する傾向の強弱（クルマの進路を変えるか、何もしないか）

回答者の国籍や年齢、宗教などに係わらず、共通の傾向があった。

- ・ ・ ・ それは、「動物より人間」、「少人数よりは多数」、「高齢者より若者」が優先された。
- ・ ・ ・ 社会的地位の高い人と交通規則を守っている人を守るという傾向も比較的強かった。

(イ) 地域と文化によって回答に差が出た

回答の傾向は、地域的・文化的に見て大まかに「東」「西」「南」に分かれる。

「東」はアジアと中東、「西」は欧米諸国とロシア、「南」は中南米諸国だとイメージすれば、だいたい合っている。（ただ、ブラジルは「西」、フランスは「南」に含まれるなど、例外もかなりある）

地域別の違いの一例を挙げると、

「南」の回答者は高齢者よりも若者を助ける傾向がわずかに強い。これは「東」と比較した場合に特に顕著（けんちょ）だという。

国別に見ると、日本やフィンランドのように治安のよい豊かな国では、信号無視をしている歩行者は、「死んでも仕方がない」という意見が多くあった。

一方で、所得格差の小さいフィンランドでは、歩行者や搭乗者の社会的地位は、助けるべきかという倫理判断にほとんど影響を及ぼさないようだ。これに対し、コロンビアのように貧富の差が激しい国では、ホームレスや犯罪者は見殺しにされることが多かった。中南米におけるマフィアや麻薬がらみの犯罪の苛烈さを思えば、ある程度は納得がいくかもしれない。

また、日本は助かる命の数を重視しない。（つまり、数よりも誰を助けるかという「質」を重視する）他に、歩行者を助ける傾向が世界で最も強い。
逆に、生存者の数を重視するのはフランスで、歩行者よりクルマに乗っている人を守ろうとするのは中国とエストニアだった。

フランスは高齢者に比べて若年層を助ける傾向も強い。これに対し、高齢者を助けるという意見が多かったのは台湾で、ほかに中国や韓国といった儒教文化の影響の強い東アジアの国々でも同様の偏向が見られた。

(ウ) 文化による「誰を救うのか」の違い

トロッコ問題と呼ばれるこの倫理学上の難問への回答からは、文化差も読み取れる。

例えば、日本、台湾、サウジアラビア、インドネシアといったアジアの参加者は、法を遵守する人、つまり青信号で道路を渡っている歩行者を救う傾向にあった。

一方、米国、カナダ、ノルウェー、ドイツといった欧米の参加者には、何もしないことを選び、クルマの走行をそのまま続けさせる傾向が見られた。

また、ニカラグアやメキシコなどラテンアメリカ諸国の参加者は、健康な人、若年者、社会的地位の高い人を助けることを好んだ。

全世界でみると、いくつか共通の傾向も表れた。モラル・マシンの参加者は、動物より人間を選び、救う命の数はできるだけ多く、そして、年少の歩行者を優先する傾向にあった。

論文著者らによれば、この研究の主眼はテクノロジーの倫理的課題についての対話を促進し、将来的には自律走行車の倫理について判断を下す立場にある人々に参考にしてもらうことにある。

トロッコ問題とは何か？ 自動運転車は「人を守るために人を犠牲にすることもある」

自律走行運転の自動車は、正しい選択をするのだろうか？ おそらくするだろう
しかし、たとえしたとしても、子どもを救うように機械にプログラミングすることで、
同時に運転手を犠牲にするように機械にプログラミングすることにもなる
このパラドックスはトロッコ問題として知られている

とはいえ、「自律」は必ずしも全ての人を救えはしない、テクノロジーは決して完璧にはならないのだ
そして、社会はその事実を、当のテクノロジーが現れる前に十分に理解しておく必要がある

6. 最後に

現代社会で、「人生をどう生きるべきなのか、人としてどのように振舞ったら良いのか」をトランプ大統領の言動や振る舞いを「論語」を通して、ふり返って、顧みてみよう。

(1) 自国優先・保護主義の弊害

「論語」は、人生の生きる道や考え方、道徳などを述べているので、一国の主義に置き換えて考えて見ると、「徳」や「仁」を持った「徳性」（「徳政」や「仁政」）が必要だと言っている。

- ① 「徳は弧ならず、必ず隣あり」・・・徳を身につけた国は、ひとりぼっちにはならない。
近くに親しくしてくれる国がきっと現れるものだ・・・**保護貿易に走ると孤独になる。**
- ② 「君子は義に喻り（さとり）、小人は利に喻る」
・・・君子はそれが正しいか、正しくないかで物事を判断するけれども、小人は利益があるか無いかで判断する・・・**自国ファーストの場合は「義」を喻る 必要がある。**

(2) 大統領・権限と弱点

アメリカ大統領は、強大な権限を持つ、行政（全て一人で決定できる）、軍の最高司令官でもある。最近（初めから）のトランプ大統領は、議会からの意見も聞かず、多くの歴史や書物からも学ばず、人から教えを請うこともあまり無く、熟慮する姿勢が見られない。

- ③ 人は学んだだけで、自分で考えることを習慣にしないと、何もはっきりとは分らない。
・・・**一人で考え込むだけで、広く学ばなければ、狭くかたよってしまう危険がある。**
- ④ 人はいかによき人物・書物に出会うか、一生懸命努力もせずいい加減では良き師に会えない。
・・・**大事なのは、長い人生を通して、よき人物や書物を求め続ければ、人間的に成長をする。**

(3) リーダー・資質と欠陥

トランプ大統領の資質を「論語」を通して問うと、君子のリーダーの資質で無く、小人の欠陥が浮かび挙ってくる。

- ① **いつも公平な目で人をみられるか**・・・君子は誰とでも広く公平に付き合っって偏った付き合い方をしない。ところが、小人はそれとは反対に、一部の気に入った人とばかり付き合っって、広く人とは付き合うことをしない。
・・・大統領は、側近が気に入らなかつたり、意見が異なると、すぐに人事を交代させる。

- ② そのとき大切なのは仁です・・・仁がない人には正しい判断はできません。だから、皆さんは自分の中にある仁をいつも大事に育てていってください。

一つの事に「こうしなさい」「これをしてはいけません」と、言ったりツイートしたり、攻撃的に振る舞うのは良くない。人間には何が大切なのかを話してあげることが重要です。

まず、仁者になろうと心掛けることで、人に優しくなれるし、自分の我がまを 抑えて皆と調和しながら生きてゆくことができます・・・大統領も、仁を習得することが大事です。

- ③ リーダーに必要な情と徳・・・徳の心を持って政治を行えば、例えば北極星が真北にあって動かずに、多くの星がそれに向かってくるように、その徳を慕って人々が集まってくる。教養や情緒が豊かであることが、人間、特にリーダーにとって大切な徳である。
・・・大統領には、リーダーにとって必要な人望（情感と徳）が足りない。

- ④ 中庸の徳こそ最高のもの・・・「中庸の徳」とは、右にも左にも偏らない（かたよらない）バランスのとれた人間性に他なりません。
・・・孔子という人物もまた、このバランス感覚をととても重視していました。

考えることと学ぶこと、勉強とスポーツ、勉強と遊び、これらのバランスを保つことはとても大切です。もう一つ忘れてはならないのは、何をやるにしても、そこに常に仁の心と中庸の徳の釣り合いがとれていることです。

・・・大統領は、常に仁の心と中庸の徳を自ら努力して、身につけて行かないとならない。

「仁」は最高の徳であり、人を思いやり、慈しむ心（いつくしむころ）とされています
「仁」があれば、おのずと道徳は保たれ、社会が安定すると孔子は説きました

現代は情報があふれ、その気になればいくらでも学ぶことができます
分からないことはインターネットなどを使えば、すぐに答えも見つかるでしょう

しかし、私たちはどこまで「考える習慣」を身につけているのでしょうか
その姿勢を私たちは、孔子や多くの仁徳のある人物や書物から学ばなければなりません

「学んで思わざれば即ちくらし、思うて学ばざれば即ちあやうし」（学んでも考えなければ、ものごとははっきりしない、考えても学ばなければ独断におちいって危険である）

我々も古典に学び、よき人物やよき書物を求めて、いつでも考える習慣を大事にし、身につけよう